新作アニメーション公開!

「押絵ト旅スル男」

「のぞきからくり」、二次元と三次元の間にある「押絵」、「双眼鏡」、凌雲閣という塔から町を見下ろす視点など、展覧会のコンセプトと共振する要素を多く持つ江戸川乱歩の「押絵と旅する男」をアニメ化し、会場内で上映します。

原作：江戸川乱歩
監督：塚原重義
キャラクターデザイン・作画監督：やぼみ
音楽：アカツキチョータ
プロデューサー：迫田祐樹
企画：トリメガ研究所（川西由里、工藤健志、村上敬）
キャスト：細谷佳正、梶裕貴、坂本頼光

© めがねと旅する美術展実行委員会／塚原重義／トワフロ

東京飛地展示

会場｜カマタ_ソーコ
入場無料

めがねと旅する美術展の東京サテライト展示として、カマタ_ソーコを会場に展示および関連イベントを開催します。
7月6日（金）、7日（土）、8日（日）、13日（金）、14日（土）、15日（日）、16日（月・祝）、20日（金）、21日（土）、22日（日）　開館時間 14:00ー20:00

機材協力｜有限会社関鉄工所、
シナノ産業株式会社、
エミリーズバルーン株式会社
出品作家｜片岡純也 / 岩竹理恵、五島一浩、
細馬宏通、メガネ、
めぐりあい JAXA 実行委員会
※「めがねと旅する美術展」の紹介展示も行います。
キュレーション：澤隆志
http://www.atkamata.jp/

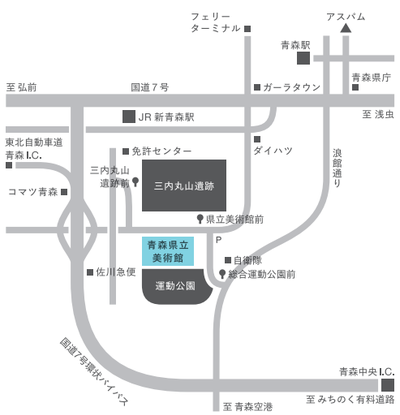
左：五島一浩《STEREO SHADOW》2008年　作家蔵
右：メガネ《Energetics of desire 発電ポールダンス》2009年　作家蔵　撮影：ゆかい「ただ」

◉展覧会の最新情報、イベントについては下記サイトを参照ください。
「めがねと旅する美術展」WEB サイト：http://torimega.com/megane/
美術館 WEB サイト：http://www.aomori-museum.jp/ja/exhibition/115/

青森県立美術館

青森県立美術館
青森市安田字近野185

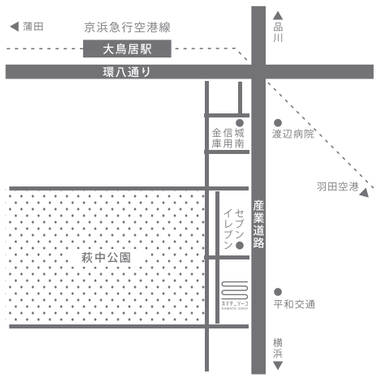
交通案内
●JR新青森駅から車で約10分
●青森駅から車で約20分
●青森空港から車で約20分
●東北縦貫自動車道青森I.C. から車で約5分
［八戸方面から］青森自動車道青森中央 I.C. から車で約10分
●青森市営バス 青森駅前6番バス停から三内丸山遺跡 行き「県立美術館前」下車
（所要時間約20分）
●ルートバスねぶたん号 新青森駅東口バス停から「県立美術館前」下車（所要時間約10分）



@カマタ

カマタ_ソーコ
東京都大田区萩中3丁目 22-7

交通案内
●京浜急行空港線大鳥居駅西口下車。産業道路を南（橋の見える側）へ徒歩５分。セブンイレブンの先。



めがねと旅する美術展

世界をとらえる、秘密をのぞく、次元を越える、だまされてみる？あるいはレンズと鏡、そして技術革新と新視覚。

2018年 7/20［金］～ 9/2［日］休館日なし
開館時間／9:00-18:00
（入館は17:30まで）

一般：1,500円（1,300円）／高大生：1,000円（800円）／小中学生：無料

※（　）は前売・20人以上の団体料金。※心身に障がいのある方と付添者1名は無料。
※コレクション展観覧料は含まれません。
前売券販売所：ローソンチケット（L:21330）、セブンチケット、まるっとあおもり検索サイト「ポみっと！」、県内各プレイガイド
※前売券は7月19日（木）まで販売

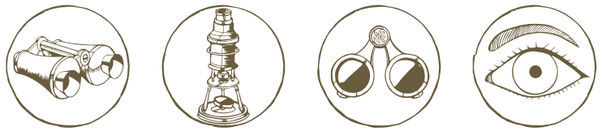
●主催｜めがねと旅する美術展青森実行委員会
（青森テレビ、青森県観光連盟、青森県立美術館）
●協賛｜ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社
●協力｜株式会社@カマタ、青い森鉄道株式会社、
株式会社JR東日本青森商業開発、津軽鉄道株式会社、
株式会社アートボックス、株式会社東京メガネ
●後援｜NHK青森放送局、青森ケーブルテレビ株式会社、
株式会社エフエム青森、青森県教育委員会
●助成｜一般財団法人 地域創造
●キュレーション｜トリメガ研究所

お問合せ：めがねと旅する美術展青森実行委員会（青森県立美術館内）
〒038-0021　青森市安田字近野185　Tel.017-783-3000
www.aomori-museum.jp

青森県立美術館

めがねと旅する美術展

世界をとらえる、
秘密をのぞく、
次元を越える、
だまされてみる？
あるいは
レンズと鏡、
そして
技術革新と
新視覚。



「めがね」、それは見えないものを見るための、世界ののぞき窓。
レンズ、だまし絵、遠近法、顕微鏡、望遠鏡、VR…。
それらは何をうつし、私たちは何を見てきたのか。
アートとテクノロジーがあぶりだす人間の「夢」と「欲望」の
世界へようこそ。

現代は膨大な視覚情報が溢れている時代です。それらを「見る」ための器具として欠かせないのが、「めがね」です。視力を補うため装置であると同時に、「レンズ」もまた広義の「めがね」として、ミクロやマクロの世界を可視化したり、写真や映像となって、私たちに新しい世界観を提示してくれます。また、「色めがね」「おめがねにかなう」などの言葉があるように、「めがね」にはものを見る際のフィルターといった意味が付されることもあります。

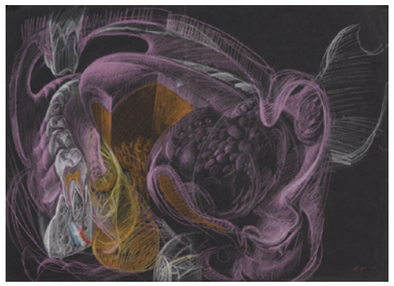
本展では、江戸時代後期の日本に視覚の革命を起こした、西洋由来の遠近法やレンズを用いた「からくり」にはじまり、列車や飛行機といった近代交通機関がもたらした新しい視覚、戦後から現代に至る目覚ましいサイエンス、テクノロジーの発展とともに変貌してきた視覚表現の軌跡を追います。あわせて、人類の普遍的な欲望である「秘められたものを見る」、「見えないものを見る」ことの試みについても考察します。

本展は、「ロボットと美術」展（2010年度）、「美少女の美術史」展（2014年度）に続く第3弾、最終章として「めがね」をキーワードに、江戸時代から現代までの「みること」に対する人々の飽くなき探求の営みをたどる視覚文化史展です。

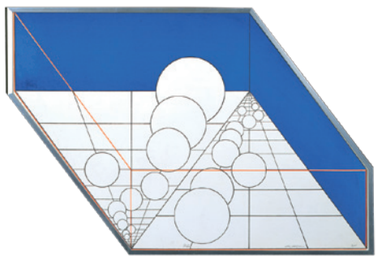
1 世界をとらえる

右：諏訪敦《新宿からの富士》 2001年　東京ステーションギャラリー蔵
下：岡田半江《洋人富士山遠望図屏風》 江戸時代後期（19世紀前半） 個人蔵

2 秘密をのぞく



だまされてみる？ 3



左上：生頼範義《口腔（口腔と咽喉）『現代の家庭医学2 病気と治療㊤』（学習研究社　昭和44年2月10日）用下絵》 1968年　個人蔵
左下：山口晃《百貨店圖　日本橋　新三越本店》 2004年　株式会社 三越伊勢丹ホールディングス蔵
©YAMAGUCHI Akira, Courtesy of Mizuma Art Gallery
上：高松次郎《遠近法の箱》1967年　青森県立美術館蔵
©The Estate of Jiro Takamatsu,
Courtesy of Yumiko Chiba Associates
右：自働パノラマ鏡　1910年頃　日本カメラ博物館蔵

◉出品作家（五十音順）

新井泉男、新井仁之 / 新井しのぶ、飯田昭二、家住利男、池内啓人、石内都、市川平、伊藤隆介、稲垣足穂、今和泉隆行（地理人）、入江一郎、岩崎貴宏、上田信、歌川国貞（三代）、歌川豊春、歌川広重、江戸川乱歩、生頼範義、大洲大作、大畑稔浩、岡田半江、金氏徹平、金巻芳俊、岸田めぐみ、北尾政美、桑原弘明、黒川翠山、小池富久、小絲源太郎、五島一浩、今純三、今和次郎、佐竹慎、司馬江漢、鈴木理策、諏訪敦、高橋由一、高松次郎、田中智之、谷口真人、谷崎潤一郎、千葉正也、塚原重義、椿椿山、東京モノノケ、中ザワヒデキ、中村宏、丹羽勝次、野村康生、原在正、菱川派、平川紀道、不染鉄、前田藤四郎、松江泰治、松村泰三、松山賢、伝円山応挙、Mr.、棟方志功、元田久治、森村泰昌、門眞妙、安田雷洲、やぼみ、山口晃、山口勝弘、山田純嗣、山本大貴、宵町めめ、吉開菜央、吉田初三郎、米田知子、リュミエール兄弟、和田高広
「Unlimited Corridor」制作チーム（東京大学大学院廣瀬・谷川・鳴海研究室＋Unity Japan）、東北芸術工科大学総合美術コース松村泰三研究室、東京大学大学院情報理工学系研究科廣瀬・谷川・鳴海研究室、北海道教育大学美術・デザインコース映像研究室、めぐりあいJAXA実行委員会（五島一浩、澤隆志）、理化学研究所脳科学総合研究センター

◉出品作品・資料・装置

浅草・凌雲閣関連資料、アンティーク眼鏡、源氏物語屏風、重訂解体新書図譜、パノラマ画、眼鏡絵、洛中洛外図屏風、カメラオブスクラ、自働パノラマ鏡、ステレオグラム、ソーマトロープ、泰山鏡（眼鏡絵器具）、TVアニメーション「名探偵ホームズ」、反射式覗き眼鏡、ピープショウ、驚き盤（ヘリシオネグラフ）等

※出品作品・資料については変更される場合があります。また一部作品は前期（7/20～8/12）と後期（8/13～9/2）で展示替えを行います。

4 次元を越える

左：金巻芳俊《円環カプリス》 2018年　作家蔵
©Yoshitoshi Kanemaki, FUMA Contemporary Tokyo/ 文京アート
下：森村泰昌《批評とその愛人（4）》（7点組の1点） 1989年　静岡県立美術館蔵

上：家住利男《P031199》1999年　作家蔵
下：池内啓人《VR ゴーグル（SF カラー）》 2015年　作家蔵

5 レンズと鏡

6 技術革新と新視覚

左上：中村宏《望遠鏡・富士山（女学生に関する芸術と国家の諸問題）》 1967年　高松市美術館蔵
右：中ザワヒデキ《アナグリフの穴》（右壁） 1993年　作家蔵